

看護師になって学校に行かせてくれたお礼を

平成21年9月29日

これは今年の春、3月26日、フィリピン・セブ島での交流合宿で、故シュバイツァー博士が資金を提供し設立した孤児院（ASFFPI）を訪問した際の話です。

引きこもり、あるいは引きこもり気味の青年や不登校の女子中学生らと一緒にこの施設を訪れ、3歳から17歳まで約20名の施設の子供達に約2時間、だるま落としや紙風船、折り紙を教え、一緒に楽しく遊びました。その時、17歳の高校生マディーさんが、彼女の4人の弟や妹達を含めた、この施設の子供達がホントに楽しく遊んでいる姿を見て、せめてものお礼に自分の身の上話をさせて頂きたいとの申し出があり、現地のビザヤ語から英語の通訳を英会話研修担当のルーシー先生が、英語から日本語の通訳をこの交流合宿の通訳をして頂いてたセブ在住のあずささんをお願いして、約30分お話を聞かせて頂きました。

彼女の父親はアルコール中毒で仕事もろくにせず、毎日飲んだくれて、母親は薬物中毒という家庭環境の中、彼女を含め、5人の子供達が生まれました。当然に生活も厳しく、カソリックのため離婚もできず、程なくして母親が子供達を置いて家を出て行きました。かといって、父親も5人もの幼い子供達を養っていくこともできず、家を出て行ってしまったのです。

それを知った母親が家に戻ってきて数日暮らしていたある日、母親が子供達に「今夜みんなで別の家に行こう。そこでみんなで暮らしていこうね」と、身支度をして家を出、夜この施設に着いたそうです。しかし、夜で当時9歳のマディーさんにもこの建物が孤児院とは分からず、きれいな部屋でみんな明日からの生活を夢見ながら並んで寝たそうです。

ところが、朝起きてみると既に母親の姿が見あたらず、ここが孤児院だと知ってマディーさんは大変なショックを受けた、と涙ぐみながら話してくれました。通訳のルーシー先生も、あずささんも訳すのが辛く、みんな涙ぐんでしまいました。しかし、マディーさんは話を続けてくれました。

「皆さん、この施設に来る時、この周りをご覧になってお分かりだと思いません。この周りには大変貧しくて家も持てず、年中暑い気候のため涼を求めて浅瀬に不法に高床の家を建て、住んでいる人達が大勢います。衛生的にもよくないばかりか、貧しさのために満足に食事も取れませんし、学校にも行くことができません。でも、私達はこの施設のお陰で弟、妹たちも、寝るところもあり、食事もでき、学校にも行かせて頂いております。だから、私はこの施設のお母さん方（施設の職員達です）のためにも、一生懸命勉強して看護師になって恩返しをしたいと考えています。みなさん、今日は弟、妹達のために、楽しく遊んで頂き、ありがとうございました。」

思わず拍手が起きました。施設の一角に何枚もの表彰式の写真が貼られておりました。マディーさんを始めこの施設の多くの子供達が、毎年学校で成績優秀で表彰され、その度に親代わりとして施設の職員が学校に呼ばれて撮った表彰式の写真でした。施設の職員の皆さまもこの子供達が自慢ですときっぱり話されたのが、なんとも心地よかったです。

この話は、この交流合宿に参加した、同じような境遇の不登校の女子中学生の心を打ち、彼女はその後少しずつ学校に通い始めました。